様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：２５２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2017
課題番号：２５４６３４５３

研究課題名（和文）介入プログラムを活用した初発乳がん患者のレジリエンスを高める看護実践モデルの開発

研究課題名（英文）Development of a nursing practice model that enhances the resilience of initial breast cancer patients using a nursing intervention program

研究代表者
若崎　淳子（Wakasaki, Atsuko）

島根県立大学・看護学部・教授

研究者番号：５０３３１８１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：乳がん患者のQOL向上を目指し、乳がん診断から周手術期及び術後治療の選択から治療過程に入る準備期の、がん診断・治療の早期に焦点をあてた看護介入プログラムを活用した初発乳がん患者のレジリエンスを高める看護実践モデルを開発した。
準実験研究デザインによる看護介入・縦断調査の結果、看護介入群は対照群に比べて、全体的なQOLが時間経過に沿って向上していた。術後1年時点の看護介入群の面接より【見通し通りの治療過程を進む安堵】【選択した治療内容の満足】【治療をやり遂げる自分への自信】等が確認された。乳がんと初期治療の理解に関する認知的支援は、治療完遂に向けて眼前の困難を乗り越える力を高めることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：To improve the QOL of breast cancer patients, we focused on the cancer diagnosis and the early stage of treatment, specifically the perioperative period after a breast cancer diagnosis and the preparatory stage for starting the treatment process after selecting the adjuvant therapy. We then developed a nursing practice model that enhances the resilience of initial breast cancer patients using an intervention program.
The results of a nursing intervention/longitudinal study with a quasi-experimental study design showed that overall QOL in the nursing intervention group improved with the passage of time compared with a control group. Interviews of the intervention group conducted one year after surgery revealed that there was “confidence in oneself for following through with the treatment.” These findings suggest that cognitive support for understanding of breast cancer and initial treatment improves patients’ ability to overcome the difficulties they face in completing treatment.

研究分野：臨床看護学

キーワード：初発乳がん患者　レジリエンス　看護実践モデル　介入研究　縦断調査　看護介入プログラム

１．研究開始当初の背景

(1)我が国における女性乳がんは罹患率・死亡率共に増加が続く現状にある。こうした中、初発乳がんは診断時より全身病と位置づけられ、初期治療は再発予防と治癒を目指してガイドラインに基づき実施される。これにより、治癒や長期に亘り再発をしないことが期待されるが、初期治療完遂までには患者には様々な困難が伴う。

(2)治療過程に在る初発乳がん患者の QOL に関する研究動向では、精神心理面では否定的側面に係る知見は蓄積された一方、患者の肯定的心理に注目した検討は途上にある。近年、医療・看護学分野において困難な状況を乗り越え精神的に自ら回復する力であるレジリエンスが注目されている。レジリエンスと乳がん患者の QOL の検討では初発患者を対象とした研究が徐々に進む中、介入研究は未だ見当たらず知見の創出が期待される。

(3)本研究は、初発乳がん患者の QOL に関して患者自身がもつ力である精神的回復力、即ちレジリエンスに注目し、治療過程に在る初発乳がん患者を対象に先行実施した面接・横断・縦断調査(若崎他 2006、若崎他 2007、若崎他 2010)から得た知見を基礎資料として作成した看護介入プログラム(若崎 2017)を活用する。そして、乳がん診断・治療の早期に焦点をあて、準実験研究デザインによる看護介入・縦断調査の実施により患者のもてる力を支持し高める看護実践モデルの開発を目指すものである。

２．研究の目的

(1)初発乳がん患者を研究参加者(以下、参加者とする)として、準実験研究デザインにて看護介入プログラムを活用し術前期より継続的に看護介入し、手術前から術後１年に亘る縦断調査を実施してレジリエンスや QOL の推移を観察する。そして、患者の評価を基に介入効果と介入プログラムの有用性を検討する。

(2)看護介入群には参加者個別の面接調査を実施し、がん診断時点からの介入効果や看護実践モデル案作成に向けた看護課題を明らかにする。

(3)上記(1)(2)を基に介入プログラムを精錬させ看護実践モデル案を作成後、実用性を検討し、患者の目標であるがん治癒を目指す初期治療完遂に向けた介入プログラムを活用した初発乳がん患者のレジリエンスを高める看護実践モデルの開発を目指す。

３．研究の方法

研究目的の達成に向けて、以下の研究計画・方法にて段階的に取り組んだ。

(1)段階Ⅰ：初発乳がん患者のレジリエンスを高める介入プログラムを活用した準実験研究デザインによる看護介入・縦断調査の実施[基礎調査]

A 病院乳腺科に乳がんの治療目的で診療を受ける初発乳がん患者を参加者とした。参加者は以下の①～③の条件を満たす者とした。①主治医より本人に乳がんと告知され、乳房の手術や術後治療の必要性に関する説明を受け、治療を受けることを承諾している、②今回の乳がん罹患や治療以前にがん罹患や乳房の手術、全身的な術前がん治療の経験がない、③高度の不安や精神科疾患の既往がなく、言語的コミュニケーションが可能である。看護介入群と対照群は、くじ引きによりランダムに割り付けた。

看護介入群への介入は参加者個別とし、場所は面談室等の個室とした。介入時期は、先行研究(若崎 2010)より術前期及び術後治療の選択から治療過程に入る準備期の２時期とした。介入プログラムにおける支援内容は、初発乳がん患者のレジリエンスを高めるために考案した①乳がんと初期治療の理解に関する認知的支援、②がん罹患や治療に伴う困難な状況に屈しない情緒的支援、③初期治療過程に対する肯定的な見通しがもて、治療中の生活過程を整える教育的支援の３点とし、介入内容の均質性を担保するため視聴覚教材(DVD)(以下、DVD とする)に全内容を収め、媒体として活用した。DVD の内容は、初期治療の理解、入院生活と手術、手術後のリンパ浮腫とその予防法、手術後の乳房の補整の仕方、抗がん剤治療中の脱毛・外見ケア等とした。DVD の活用は、初発乳がん患者に提供される日常看護の上乗せ効果がねらいであり、介入以外の条件について群間を最大限等しくした。両群への看護の提供について、A 病院で初発乳がん患者に提供される、日常的に実践される外来看護や病棟看護は通常通りに看護師が実践した。

データ収集は、①両群に無記名・郵送法による自記式質問紙調査を実施した。調査内容は我々の先行研究を参考に測定用具を用いて以下の内容で構成した。レジリエンス：精神的回復力尺度(小塩)、QOL：QOL-ACD、QOL-ACD-B、SRS-18(心理ストレス反応)(鈴木)、GSES(一般性自己効力感尺度)(坂野)、年齢や婚姻・子ども・就業の有無等の個人的要因、治療法に関する疾病要因等。調査時点は術前、術後１週間、2 週間、3 ヵ月、７ヵ月、術後１年の６時点とした。②看護介入群には参加者個別に半構成的面接を２回実施した。面接時期は、１回目は看護介入後の術後治療過程に入る準備期、２回目は術後１年時点とした。面接ガイドは、１回目の面接では、DVD 視聴により理解した内容・役に立った内容・改善点・さらに知りたい事柄・心理的状況に係る内容を、2 回目の面接では乳がん診断から治療過程の１年を振り返る内容や DVD の活用状況、現在の心理的状況を中心に構成した。

(2)段階Ⅱ：患者の評価に基づく介入効果と介入プログラムの有用性の検討並びに看護実践モデル案作成に係る課題の整理

先ず、介入効果をみるため①自記式質問紙

調査について：調査票への回答内容は統計学的手法を用いて反復測定による分散分析等を実施した。②半構成的面接調査について：面接内容の分析は質的帰納的手法を用い、参加者別の個別分析後、全参加者分析を実施した。次いで、分析結果を基に介入効果と介入プログラムの有用性を看護学、乳腺腫瘍学、心理学の視点から討議・検討した。併せて看護実践モデル案作成に係る課題を整理した。
(3)段階Ⅲ：段階Ⅰ・Ⅱを基に介入プログラムを精錬させ看護実践モデル案を検討、実用性を点検し、介入プログラムを活用した初発乳がん患者のレジリエンスを高める看護実践モデル最終案を作成した。

４．研究成果
(1)介入プログラムによる介入効果とプログラムの有用性
看護介入・縦断調査に係る参加者は計 43 名で、内訳は看護介入群 29 名、対照群 14 名であった。脱落は、看護介入群で 3 名であった。参加者の概要について、平均年齢は、看護介入群が 54.5±11.7 歳、対照群が 59.9±9.5 歳であった。実施術式は、看護介入群では乳房温存術 15 名、乳房切除術 11 名であり、腋窩リンパ節郭清をした者は 26 名のうち 8 名であった。対照群では、乳房温存術 5 名、乳房切除術 9 名であり、腋窩リンパ節郭清をした者は 14 名のうち 5 名であった。病理検査結果に基づく術後薬物治療は、看護介入群では不要と判断された 1 名を除き、25 名が受けていた。対照群では 11 名が受けていた。
①自記式質問紙調査について：
介入群・対照群（2）×時間経過（6）の二元配置分散分析を実施した。項目毎に欠損値があるものを除き分析した。主効果があるものは多重比較を行なった(統計ソフト SPSS25 を使用)。有意水準は P＜.05 とした。分析の結果、QOL では、活動性 QOL、身体状況 QOL、社会性 QOL、全体的 QOL で主効果が認められた。全体的な QOL で交互作用が有意傾向であった。看護介入群は対照群に比べて、全体的な QOL が時間経過に沿って向上していた。レジリエンスでは、主効果、交互作用共に有意な結果は認められなかった。SRS-18 では、抑うつ・不安、不機嫌・怒りに主効果が認められた。多重比較の結果、抑うつ・不安で術前に比べて術後 1 年時点で有意な差が認められた。GSES では、能力の社会的位置づけに主効果が認められた。多重比較では各時期の有意差は認められなかった。自分自身の知識の満足や現在の治療の満足では主効果が認められ、看護介入群は対照群に比べて、知識と治療への満足が確認できた。
②看護介入群に対する半構成的面接調査について：
DVD の視聴は、術前期と術後 1 ヵ月までに参加者全員が視聴していた。参加者により語られた面接内容の質的分析より、術前期では【手術の方法の理解】、【手術前後の経過や過ごし方の参考】、【映像による初期治療過程の解りやすさ】につながっていた。術後期では【術後薬物療法選択に用いる知識の獲得】、病理検査結果に基づく術後薬物治療について【医師の説明内容の照合と理解の助け】となっていた。腋窩リンパ節郭清をした者では【日常生活でのリンパ浮腫予防や外傷予防行動の実行】につながっていた。術後薬物治療と就業の両立を目指す参加者では、職場復帰時の【上司への病気と治療内容の説明に活用】していた。初期治療過程 1 年では、「次々の治療だけど先生からの説明通りに進んでいるからね」と【見通し通りの治療過程を進む安堵】や迷いながらも自身で意思決定できた【選択した治療内容の満足】、困難に対して自分が対処し【治療をやり遂げる(た)自分への自信】、【日常生活に即した自己管理の意欲】等が表出され、肯定的志向が確認できた。また、医師や看護師と「(診断・治療の)早くから繋がっている実感がある」ことも語られた。
以上の結果より、乳がん診断・治療の早期に焦点をあてた介入プログラムに基づく乳がんと初期治療の理解に関する認知的支援は、患者の満足につながり、レジリエンス概念に照らして眼前の困難を乗り越え自己への信頼を高めることが示唆された。
また、初期治療を継続する乳がん患者の就業について以下の知見が得られた。看護介入群の有職者で、乳がん罹患・治療開始後に退職した者は 1 名であった。術後薬物治療を受けながら就業する様態は、【元の職場に復職就労する】、【職場の理解を受け業務遂行する】、【パートタイム労働を選択する】、【経済的理由でやむを得ず就労する】、【治療内容を隠さず就業と両立する】、キャリア構築年齢に在り好きな仕事に従事でき【生きている実感を得る】等であった。患者はがん治療に伴う身体変化や体力、経済状況と向き合い、培った職場での関係性や対応力を基盤に、迷惑をかけない業務遂行と治療の両立に向けた働き方に努める様態が明らかになった。
(2)看護実践モデル案作成に係る課題の整理
①術後抗がん剤治療過程では、【予想を超えた体感の有害事象による身体的苦痛への苛立ち】、【有害事象と対処に関する具体的情報の要求】、【治療開始前の脱毛準備では不満足な整容性への継続的関心】、【治療と就業両立の緊急的検討による社会的機能維持への意思】等が整理された。初期治療完遂に向けて、治療継続期間中の患者の情報的・情緒的な援助要請を適切に把握し、実生活に密着した教育的支援の必要性が示唆された。
②長期に亘る術後ホルモン療法では、【術後各治療に伴う心身の違いの実感】、【がん治療に関する最新情報提供への要望】、【ホルモン療法中の生活の注意点と工夫】等が表出され、薬物治療に関する最新情報要望への応答や日常生活を自己管理できる実効レベルの教育的支援が課題と考えられた。

(3)看護実践モデル最終案の作成と今後の課題

看護実践モデル案作成に係る課題に対する具体策の追加並びに乳がん初期治療情報を最新情報に更新し、乳がん体験者の協力を得て看護実践モデル案を検討後、乳がん認定看護師を交えて実用性を点検しモデル最終案を作成した。

レジリエンスは周囲からの働きかけや支援により変化し得る[1]ことが示され、また、レジリエンスに寄与する要因として認知的対処やヘルスケアの質[2]が報告されている。この点に注目した看護実践は重要であり、今回、初発乳がん患者の治療目的に即して診断・治療の早期から看護介入し、縦断的に検討できたことには意義があった。今後、介入プログラムを活用することで一定の看護の質を保証できる看護実践モデルの錬磨が必要である。その上で、初発乳がん看護の均てん化を展望している。

<引用文献>
1.藤原千恵子.看護研究.2009;42(1):37-44.
2.森信繁.臨床精神医学.2012;41(2):175-80.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計３件）

①若崎淳子、谷口敏代、森 將晏:治療過程に在る初発・再発および定期的外来受診を続ける成人期乳がん患者の QOL に関わる要因：(第１報)レジリエンスの相違および心理社会的側面からの検討.日本医学看護学教育学会誌 25(2):8-17、2016.査読有.

②谷口敏代、若崎淳子:成人期乳がん患者の QOL と知覚されたソーシャル・サポートとの関連.インターナショナル Nursing care research 15(4):1-10、2016.査読有.

③谷口敏代、若崎淳子、松田実樹、植村華江、合田衣里、米原あき:がんに罹患している利用者を支える訪問介護員の役割とケア困難感.インターナショナル Nursing care research 15(2):83-92、2016.査読有.

〔学会発表〕（計 14 件）

①若崎淳子、原　真紀、掛橋千賀子、谷口敏代：初期治療過程 1～1.5 年に在る成人期乳がん患者の就業の様態、第 32 回日本がん看護学会学術集会、2018.

②若崎淳子、谷口敏代、伊藤奈美、掛橋千賀子：乳がん検診受診経験の有無による成人期女性が乳がんについて知りたい内容、第 37 回日本看護科学学会学術集会、2017.

③若崎淳子、谷口敏代、掛橋千賀子：初期治療過程１年に在る術後ホルモン療法中の成人期乳がん患者の心理的状況、第 43 回日本看護研究学会学術集会、2017.

④若崎淳子、野村長久、谷口敏代、加藤真紀、小原(畠中)佑佳、山下一也、園尾博司:成人期女性の乳がん検診に関する現状と心理的状況-検診受診経験の有無による相違-、第 26 回日本乳癌検診学会学術集会、2016.

⑤若崎淳子、谷口敏代、掛屋純子、掛橋千賀子:初期治療過程に在る成人期乳がん患者の病理検査結果に基づく術後抗がん剤治療選択時の心理的状況、第 42 回日本看護研究学会学術集会、2016.

⑥若崎淳子、谷口敏代、原　真紀、掛橋千賀子：抗がん剤治療を受ける術後治療過程に在る初発乳がん患者の心理的状況、第 30 回日本がん看護学会学術集会、2016.

⑦若崎淳子、松本啓子、原　真紀、谷口敏代：成人期の娘をもつ初期治療過程に在る乳がん患者の心理的状況～乳がんと遺伝に関する発言に注目して～、日本遺伝看護学会第 14 回学術大会、2015.

⑧若崎淳子、松本啓子、掛橋千賀子、谷口敏代：初期治療過程に在る初発乳がん患者の配偶者の心理的状況、第 41 回日本看護研究学会学術集会、2015.

⑨若崎淳子、掛橋千賀子、谷口敏代:初期治療完遂後に在る初発乳がん患者の心理的状況、第 29 回日本がん看護学会学術集会、2015.

⑩若崎淳子、掛橋千賀子、谷口敏代:介入プログラムを活用した初発乳がん患者のレジリエンスを高める看護実践モデル開発-術前期看護介入の検討-、第 34 回日本看護科学学会学術集会、2014.

⑪若崎淳子、掛橋千賀子:初発乳がん患者の乳がん検診に対する心理的状況、第 40 回日本看護研究学会学術集会、2014.

⑫若崎淳子、谷口敏代、掛橋千賀子:治療過程に在る成人期初発乳がん患者の復職就労に向けた心理社会的状況、第 28 回日本がん看護学会学術集会、2014.

⑬若崎淳子、掛橋千賀子、谷口敏代:治療過程に在る初発乳がん患者のレジリエンスを高める看護介入プログラム開発-視聴覚教材活用の効果と課題、第 33 回日本看護科学学会学術集会、2013.

⑭若崎淳子、谷口敏代:定期的外来通院を続けるがん治療後に在る成人期乳がん患者の QOL に関わる心理・認知的要因、第 39 回日本看護研究学会学術集会、2013.

〔図書〕（計１件）

①若崎淳子：照林社、エキスパートナース 33(7)、2017、知るとケアがもっとよくなる！ どうなっている?患者さんの心の中 第 15 回 治療過程にある初発乳がん患者さんの心理と看護-周術期を中心に-、92-101.

〔その他〕（計２件）

①若崎淳子：メディカルレビュー社編集・エーザイ株式会社、乳がん診療におけるチーム医療-よりよい乳がん診療を目指して-、2014、明日から現場で活かせる心のケア-乳がん治療の心理的サポート:治療過程に

在る初発乳がん患者のレジリエンスを高める看護介入プログラム開発過程を中心に-、1-11.
②若崎淳子:座談会「乳がん診療におけるチーム医療－乳がんチーム医療の今後の展望-患者のQOLの向上を目指して－」、エーザイ株式会社主催研究会、2014.

６．研究組織
(1)研究代表者
若崎　淳子（WAKASAKI ATSUKO）
島根県立大学・看護学部・教授
研究者番号：50331814

(2)研究分担者
園尾　博司(SONOO HIROSHI)
川崎医科大学・医学部・附属病院長
研究者番号：60136249

谷口　敏代(TANIGUCHI TOSHIYO)
岡山県立大学・保健福祉学部・教授
研究者番号：10310830

掛橋　千賀子(KAKEHASHI CHIKAKO)
島根県立大学・看護学部・教授
研究者番号：60185725

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
森　將晏(MORI MASAHARU)
倉敷中央病院・病理診断科・病理専門医

橋本　幸直(HASHIMOTO KOUJI)
島根県立中央病院・乳腺科部長・乳腺専門医

原　真紀(HARA MAKI)
島根県立中央病院・乳がん看護認定看護師